東京都市大

関東整備局と連携 工事現場を「生きた教材」に

工事現場を「生きた教材」に―。東京都市大学工学部都市工学科の講義に、関東地方整備局が手掛けている高速道路やダムなどの土木インフラの工事現場が活用されている。関東整備局の工事現場はこれまで一般向けに公開はされてきたが、大学の講義内容の一部に現場見学が組み入れられたのは初めて。同大は今後も国と連携し、土木技術の最前線を学生が体感できる機会をつくっていく方針だ。

工学部で講義に組み入れ

最前線の土木技術体感

首都圏中央連絡自動車道、東京外かく環状道路、八ツ場ダムなど関東地方には今しか見られない大規模な公共土木インフラの工事現場が数多くある。同大の吉川弘道工学部都市工学科災害軽減工学研究室教授は「こうした生きた教材から学ぶことは、学生たちの今後のキャリア開発にもきっと生かされる」と考え、国の工事現場に学生と出向き、現場で授業を行うことにしたという。

本年度に開設した講義の名称は「首都圏インフラツアーズ&ワークショップ」。工学部都市工学科に在籍している3年生を対象に参加者を募集した結果、約100人の学生が集まった。現場見学は5月中旬～6月中旬に行われ、▽外環道千葉県区間▽新宿駅南口基盤整備事業▽岩淵水門▽高規格堤防（スーパー堤防）▽八ツ場ダム▽首都圏外郭放水路▽東京港トンネル―など複数の現場を見て回ったという。

八ツ場ダムの見学では、関東整備局の担当者がダムサイトの周辺で進む付帯工事の状況や、完成した付け替え道路（橋梁）の構造の特徴などを説明。荒川周辺のスーパー堤防の見学では、荒川が人工的に造られた放水路ということを初めて知った学生も多かった。参加した学生からは「現場の生の雰囲気を直接感じられ、貴重な経験になった」と好評だった。

今月2日には東京都世田谷区の世田谷キャンパスでこれまでの現場見学の成果を報告するワークショップを開き、教授と共に3年生を引率した4年生や大学院1・2年生らが各プロジェクトのポイントなどをあらためて解説。3年生は土木工学の専門家としての視点を先輩たちからも学んだ。

報告会に出席した関東整備局の辛嶋亨企画部企画課長は「実際の現場の工夫を肌で感じ取ってもらえたのではないか。大学で学んでいる学問がどう社会に生かされているのか考えるきっかけになってくれればありがたい」と感想を伝えた。

同大は今後も同様な授業を継続していく考えだ。吉川教授は「他の大学にもこれから声を掛け、国の工事現場を授業で活用する輪を広げていきたい」と話している。

現場見学で訪れた東京港トンネル

今月２日の報告会